

【KBS京都賞】

つながる思いやり

京都府立洛北高等学校附属中学校 3年 松村 侑香

「こっち、空いてますよ。」

これは通学途中での出来事だ。私は、電車通学をバス通学にかえたばかりで、揺れるバスの中でつまずいて前に倒れないように、手すりにつかまり、足をふんばっていた。

私が毎朝使うバスの沿線には、視力障害をもつ人が多く利用する福祉センターがあり、目の不自由な方がそのバスを利用される。また、大きな病院もあり、そこで働かれている人や、その病院を利用されている患者の人達が、そのバスに乗車し、毎朝、満員だ。運転手が、

「ドア付近に立たないでください。一步、奥に入ってください。」

と何度も連呼するほどだ。

その日も満員だった。ある停留所で、目の不自由な方が乗車した。その方は、満員だったため、入口付近の壁に沿って立たれた。次から次に乗って来る他の乗客にぶつかったり、あたったりしないよう、窮屈そうに立っていた。優先座席は1席だけ、誰も座らず空いていた。私は、自分の立っている位置がその方から遠いということと、座席をゆずるなどの行為をしたことがなかったため、声をかける方法がわからず緊張していたことで、「誰か声をかける人はいるだろうか」とずっと見つめるだけだった。

その時だ。近くに立っていた女性が

「こっち、空いていますよ。」

と声をかけ、肩を持って座席に案内した。

私はとても安心したのと同時に、本当に座席に案内した人がいるということに驚いた。

この出来事をきっかけに、私も、目の不自由な方が乗車すると、座席に案内するようになった。そして、だんだん、高齢の方にも席を立ててゆずるようになった。そういう時には、決まって必ず「ありがとうございます。」

や、

「助かるわぁ。」

などという言葉がかけられる。とても小さなことだが、お礼の言葉をかけられたときには小さな喜びを感じる。

私は、このような経験をして、次のように感じた。思いやりは、つながっていくのではないかと。

実際に、私も、ある女性が座席に案内しているという姿を見たから、同じようにする勇気が生まれた。困っている人の力になりたいと思っていても、そういった気持ちを行動に表すことは、「何か問題が起こったりしないだろうか。」「親切にされた人が逆に嫌な気持ちになることはないだろうか。」と深く考えてしまったり、心配したりするので、とても難しい。しかし、誰かが思いやりを発信している姿を見ると、自分自身にもその発信された思いやりを、再び発信する勇気がうまれるのではないだろうか。

そうして、遠く離れた誰かから発信された思いやりは、再び誰かによって発信され、それが続き、社会が思いやりでいっぱいになるのだと思う。

日本には、「情けは人のためならず。」ということわざがある。これは、人に情けを掛けておくと、巡り巡ってやがて自分に親切が返ってくるという意味だ。これは、思いやりがつながっていくということと同じことだと思う。

私は、体調を崩すこともある。また、将来子どもを連れて出かけたりすることもあるだろう。そして、もちろん、高齢にもなる。必ず、助けを必要とする立場になるだろう。そんな時に、今、自分が発信している思いやりが、返ってきてくれたらとても嬉しい。

助け合う社会のために、私たちができることは、思いやりを再び発信することではないだろうか。思いやりを受け取った人が、感謝を伝えることも大切だ。

再発信には少し緊張する。不安にもなる。しかし、思いやりをみて、自分がそれを発信していくことで助かる人がいる。

だから、私は今日も言う。

「こっち、空いていますよ。」